

5. スケジュール



主なイベント

- 2月28日 一日目
ネパールカトマンズ集合
- 3月1日 二日目
タンセンへ移動 バジさん合流
- 3月2日 三日目
キャンプ地 ドウリシェニ村到着
- 3月3日 四日目
ワーク始まる。
- 3月4日 五日目 ~ 3月6日 七日目
ワークとおやつが楽しみになる。
- 3月7日 八日目
隣町サチコールへ遠征 大歓迎を受ける
- 3月8日 九日目
病人が出ながらもワークを頑張る。
- 3月9日 十日目
ブトゥケ村遠征・宿泊、豚を殺し、喰う。
- 3月10日 十一日目
ブトゥケ村で水汲体験。ドウリシェニ帰村。
- 3月11日 十二日目
待ちに待ったホームステイをする。
- 3月12日 十三日目
日本食を振舞い、古着等を配る。
- 3月13日 十四日目
村人とピクニックへ
- 3月14日 十五日目
リンネラハの学校へ。バレーボールの試合。
- 3月15日 十六日目
ワークの仕上げと、お別れパーティー。

ネパリータイム

村に入る前にバジさんから聞いた話では、ネパールでは時間の感覚が違い(ネパリータイム)、約束も何時からというよりも午前中(もしくは午後)に…っていう感じだった。でも村での生活中は、ユースの人たちが時計を気にしながら動いてくれたのか、ほぼ時間どおりに事が運んでいった。むしろ村での生活が長くなるにつれて日本人のほうが時間にルーズな感じになっていた。(バジさんにそうなっちゃだめだよって忠告されてたのに…)ただ、確かにゆったりとした時間がネパールには流れていた。なにかに焦ることもなく、一人一人が自分の時間ってのをもっているのんびりすごしていた。村からカトマンズを経て日本に帰ってくる間に、周りを流れる時間がだんだんとはやくなっていき、それにつれて人々が常に何かに追われているような顔になっていくのを感じた。

BY ポブ

6. キャンパーの生活

6:00~8:00 起床

にわとりの鳴き声に起こされる。それにもめげずリーダーは8時ぎりぎりまで眠るのです。

8:00 ティータイム

軽食をとってワークにそなえるのだ。ちなみにネパール人は朝ごはん食べないんだって。

メニュー例：インスタントラーメン（汁なし） ジャーマンポテト（でもカレー味…）

ゆでたまご、ビスケット（クミンが入ってる）

9:00~11:30 午前のワーク

しっかり働くとごはんがおいしいぞ！

お昼が近づいてくるとタローが必ず言う。「きょうのお昼はなにかなあ？」

カレーだっつーの！ ※カレー=ダルバート

12:00 昼食

ダルバートを喰らう。村人は食べる食べる次々におかわりをすすめてくれる。断るとちょっと寂しそう。でもホントにもうお腹いっぱいなんだってば！何杯目だよっ！

14:00~17:00 午後のワーク

15:00頃にはおやつタイムが有り。

一日のワークが終わりに近づくころ決まってタローが言う。「きょうの夕飯はなにかなあ？」

18:00 夕食

もちろんダルバートを喰らう。2週間でじゃがいも1年分食べたはず。

おいしく食べるためのマーガル語：いただきまーす「ジャランハイ！」

おいしー「ジャップマレー！！」おかわりすすめてくれたらくださいな「アリカティ」

いらねーよ「オラ」（最重要単語）

夕食後はミーティングをして、その後はそれぞれ思い思いに過ごしました。電気がないから真っ暗、かと思ってたけどお月様ってあんなに明るいんだね。知らなかった。

20:00~ 就寝

21:00~ ミッドナイトアダルトクラブ

眠れないキャンパーがひとり、またひとりと集まり夜な夜ないろんなことを語り合った。でも無理しすぎて体調崩したキャンパーもいたとかいないとか。 BY つよぽん

「HOME STAYしちゃいました。」

村人の生活をもっと知りたい、肌で感じたい！ということで、キャンパーが2,3人1組になって人の家にホームステイ！それぞれのおうちでダルバートをたらふく食べて、ロキシーを飲みまくって、片言のネパール語と身振り手振りで会話して、ネパリダンスを踊って…と楽しい一夜を過ごしました。（でも就寝は早いよ）ホームステイでの発見。大人も子供も本当によく食べる（マンガ日本昔話の山盛りごはんの3倍くらい?!）動物の糞と土をミックスしてできた家はとっても暖かい（居心地最高◎）村人との交流を深めて、みんなにとって忘れられない素敵な夜になりました。

～ホームステイを終えて～

待ち遠しくて仕方なかったホームステイ。アマ（お母さん）を初めとして一家みんなが温かい笑顔で迎え入れてくれた。同じ釜の飯を食べ、カタコトの会話で笑いあい、身体をくっつけあって眠る時間を通して、村人の普段の生活、暮らしを垣間見ることができた気がする。貧しく質素だけど素朴で幸せな家族。ホームステイをきっかけに距離がまた少し縮まった。「日本に帰らないで。あんたたちが帰ったら悲しくて泣いちゃう」そう言ってくれることが嬉しくて、そして泣きそうになった。

BY あい



いただきます～今日もカレー曜日～

朝食…チャイ(ミルクティーの様なもの)またはコーヒーとビスケット、タマゴ、豆など。

昼食…ダル、タルカリ、ごはん

おやつ…ラーメン、サモサ、チャパティなど

夕飯…ダル、タルカリ、ごはん

ダルとは豆の入ったスープカレーで、タルカリはジャガイモと他の野菜(キャベツだったり、タマネギだったり)のカレー味の炒め物です。基本的には野菜ばかりの食事ですが、朝、手にぶらりとニワトリを提げた子の姿を見かければ、その日のご飯には鶏のカレー煮込みが追加されます。朝とおやつの軽い食事を除けば、ダル、タルカリ、ごはんが毎日続くわけで、「おいしいおいしい」と毎日たらふく食べながらも、キャンプ終盤では「1年分の芋は食べた…」「カレー味じゃないものが食べたい…」とこぼしてしまったのも実際のトコロ。

ネパールの村人は基本的に食事は1日2回。けれども、おなか空いちやわないの?という心配はご無用。なぜなら、小さな子から、きれいなお姉さんから、町で見かけたおじさんから、みんな食べる、食べる。山盛りのご飯をぺろりとたいらげ、お代わりまでもらう始末。そんなわけで、キャンパーによそってくれるご飯も山盛りいっぱい。その上「おかわりは?」としょっちゅうまわって来るもんだから、食卓では手をパタパタさせながら(お腹いっぱいというサイン)「プギョッ!!(日本語訳:お腹いっぱい!!)」「アリカティッ(日本語訳:ちよつとだけっ)」「オラオラッ!!(お腹いっぱいです!!マーガル語)」の言葉が飛び交います。けれども、村人が作ってくれたご飯は愛情がこもっていて、とてもとてもおいしかったです。後日、日本で「お水いかがですか?」と言う店員さんにむかって、手をパタパタして「オッ…」と言ってしまったのはないしょの話。

BY ターナー



村のトイレはスキだらけ・・・

トイレは泊まっていた学校のすぐ横にあり、小屋のような、だけどきちんとした建物であった。思ったよりきれいで、簡素であった。水洗式ではあるが、水は自分たちで流さなければならない。水はペットボトルに入れてストックしておくが、水が出ないときがあるので、出るときにストックしておかなければならない。紙は詰まる可能性があるので、備え付けのビニール袋に入れておくが、自分は抵抗があった。ボックスを作っても良かったかなと感じた。

ネパールの村にトイレを設置しようとする計画がよくあるようですが、ネパールではトイレで用を足すという考えがないようで、せっかく作っても利用されずに倉庫代わりに使われることがあるので、地域の習慣などを考慮して、プロジェクトを立てる必要があると感じる。日本と違い圧倒的に人口密度が少ないのでゴミやトイレの問題が起こらないのだろう。

バジさんに水で洗う方法を伝授してもらったが、失敗すると足がぬれてしまうが、割とうまくいく。紙はすぐなくなってしまうので、水で洗うのは重要であると感じる。ちなみに手は不浄の左手でふく。

一度山羊の集団が通り、屋根とか上る音にマヂでびびった。あと村のこどもに覗かれた。

BY もりりん

豚を殺した男



紅の豚

ブトゥケ村殺豚事件簿

自分の手で生き物を殺して、それを食べたところで「生かさされた」という感覚は本当に得られるものだろうか。キャンプでは豚を殺して食べたが、私たちはこの時豚を食べなくても生きれたわけで、この豚を食べないと死ぬというわけではなかった。

むしろ貴重な食料を私たちが食べる事で、村人達の生活に支障をきたさないかどうかについて考えることもできた。OK バジさんの話では、村人は自分たちの出来る範囲のことをする、とのこと。また、お客さんを最優先と考えるのか、私たちが食べ終わって寝るまで料理に手をつけなかった。

生き物を自分で殺して食べるというのは村人からすれば日常茶飯事で、私たちがそれを体験してあれこれ考えるのは仕方がなく、とても大切なことでもある。ただしそこで命について考える事が出来たのは、全て村人達のおかげだったということをお忘れはならない。

豚殺し実行犯の供述

「いただきます」という言葉は、自分が生きるために殺された生き物に対して、感謝するという意味がある。(と僕も思っていた・・・)

その言葉の意味を確かめるために僕は、振舞われた豚を殺さなくてはと思った。「命を奪って生きているのだから感謝しなさい」といわれて育ってきたからにはそれを体感してみたい、チャンスは今しかないと思っていた

そしてついに豚がやってきた。口と前後の足を縛られたそれは、これから殺されるのが分かっているかのように必死に暴れていた。それを見た僕は「無心になれ」と自分自身に言い聞かせていた。そして村人からいかついナイフを受け取った僕は、それを豚の首に突きつけた。そして・・・

その日の晩御飯の「いただきます」には感謝というより、これを残してはいけないという責任の意味が相応しい気がした。

実際に豚を殺したときの気分として罪悪感はなかったが、達成感も無かった。パックで売られているものと、直接自分で手を下したものでは、食べるときの気分が全然違うことが分かった。

日本では無意識に食べるばかりで、その過程を知らなかった僕には貴重な経験ができたと思う。あの鳴き声と眼差しは今でも忘れられない。

BY ちかちゃん



WALK

キャンプの思い出・・・それは「歩いた」こと。といっても過言ではないほどキャンプ中の私たちはよく歩いた。村には車、自転車の類はほとんど普及していない。ほとんどの道が幅の狭い山道であり、経済的な理由まで考えると納得できる話である。村人はよく歩く。

彼らにとって2, 3時間の徒歩は問題ではない。私たちもキャンプ中サチコール、ブトゥケ、リンネラハなどの村に移動した。



水の少ない生活

水の無い村、ブトゥケ。山の上にあるこの村はバジさん曰くとても貧しい村。一日だけ体験と言う事でこの村に訪れました。村には大きなコンクリート製のタンクがあり、朝の水汲みでこのタンクに水を運ぶお手伝いを私たちキャンパーで行う事になりました。朝の6時、村の子供達に連れられて山の中腹付近にある水場へ。15?入る水桶に水を汲み、ドコナムロと言う円柱状のカゴに入れて運びました。村の子供達はこの水汲みを朝の暗いうち（4時くらい）から始めて三回くらい行うそうです。ちなみに、キャンパーで村まで水桶を運んで行けたのは数人でした。



水の重さ

水汲みは本当に大変な仕事でした。朝起きる時間といい歩く時間といい、私の「お手伝い」という時限を遥かに超えていました。首が何本あっても足りません！でもネパールの子供達は、この過酷なお手伝いを文句も言わずにやっていました。家族のために自分が出来る事をやる。家族を助けると言う事が当たり前。家族との絆が日本よりもとても強いように感じました。日本で文句を言いながら手伝いをしていた自分が恥ずかしくなりました。今度実家に帰ったら率先してお手伝いをしないと！

BY さとこ

日本とは明らかに違うネパールの道。舗装などはほとんどされておらず、限りなく自然に近いものである。岩だらけの道、険しい山道、時には川までも渡り、村から村へ歩いた・・・。「歩けるところはすべて道」ともとれるネパール人の考え方はキャンパーたちの道の定義すら変えてしまった。山のふもとでジープを降りて、十数キロのバックパックを背負い山登りをしたことから始まった、村での自分の足のみで動く生活。「歩く」という行動はキャンパーにかつてない疲労感を、そしてときには大きな達成感を与えるものになった。

